



DZ22714 上田 遥希

## 門前町再編プロトタイプ

### ー観光と定住の共生を導く空間モデルの提案ー

#### Keywords

門前町 再生 コミュニティ 観光  
定住 共生 祭り 神社空間

#### 1. 導入

神社仏閣の門前町は、参拝という宗教行為を起点に、人々の往来と滞在を受け止める場として形成されてきた。

参拝者を迎える宿泊施設や商店、職人の工房などが立ち並び、外部から訪れる人々と地域に暮らす人々の日常が交差することで、独自の空間と文化が育まれてきた。そこでは、非日常としての参拝体験と日常的な暮らしが自然に共存していた。

門前町は単なる通過点や観光地ではなく、人と人との関係性の中で成立する、開かれた生活空間として機能してきた歴史が存在する。

#### 2. 研究背景

参拝者を迎える宿泊や商いの場として形成され、信仰と日常の暮らしが交わる地域として発展してきた門前町は近年、観光業の拡大や生活様式の変化に伴い、居住人口の減少や商店の衰退、空き家や空き店舗の増加といった課題が顕在化している。

観光客数は増加している一方で、地域住民による日常的な利用や賑わいは失われつつあり、観光と定住の分断が進行しているのが現状である。

このような状況を踏まえ、門前町を単なる観光地として捉えるのではなく、住民の生活と来訪者の滞在が重なり合う場として再編し、観光と定住が共生する現代的な門前町の空間モデルの在り方を問い直す。

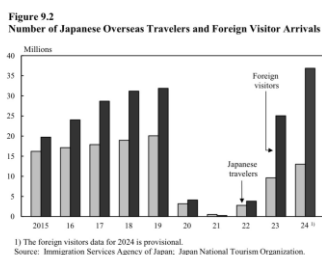
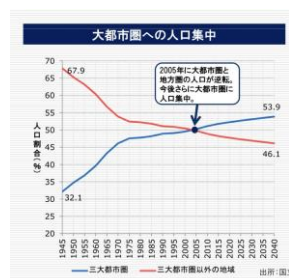


図1 観光需要の拡大（左）地方人口の低下（右）



#### 3. 敷地

対象敷地は、茨城県鹿嶋市鹿島神宮周辺の門前町とする。鹿嶋市は、関東屈指の古社である鹿島神宮を有し、年間を通して多くの参拝者や観光客が訪れる地域である。近年では、国内観光やインバウンド需要の回復、拡大に伴い、神社仏閣を目的とした観光客数も増加傾向にあり、鹿島神宮周辺においても観光地としての側面が強まっている。

一方で、門前町を含む周辺市街地では、かつて地域の暮らしや参拝者を支えてきた商店や宿泊施設の減少が進み、中心市街地の空洞化や地域産業の衰退が顕在化している。また、人口減少や高齢化が進行し、地域産業や祭礼を担ってきた人材の不足、若年層の地域外流出といった課題も深刻化している。

このように、鹿嶋市の門前町は、観光需要が高まりつつある一方で、地域の日常的な営みや居住環境が弱体化しているという、観光と定住の乖離が生じている地域である。以上の背景から、観光客の増加と人口減少や高齢化という状況が進行する鹿嶋市鹿島神宮周辺を対象敷地として選定し、門前町の再編可能性を検討する。



図2 鹿嶋市の人口推移（左）高齢化率推移（右）

#### 4. 分析

まず門前町が抱える課題を整理する。

- 1) 観光客の増加に対して地域住民の生活人口が減少しており、日常的な賑わいが失われつつある。
- 2) 参拝を目的とした滞在は短時間化し、観光行動が神社境内に集中することで、周辺の商店街や居住エリアとの関係性が希薄化している。
- 3) 高齢化や後継者不足により、商店や住居の維持が困難となり、空き家や空き店舗の増加がまちの連続性を分断している。

一方で、門前町には観光客と地域住民を結びつける潜在的な要素が存在している。

- 1) 祭りや年中行事に代表される地域文化
- 2) 参道や路地空間といった歩行者中心の空間構成
- 3) 宿泊や休憩を前提とした滞在の文化
- 4) 日常的に利用される飲食や商いの場
- 5) 神社を中心とした文化と生活の重なり
- 6) 歩や子どもの遊び場としての公共的な空間

これらの要素は本来、観光と定住を緩やかに接続する役割を担ってきた。これらの要素を再解釈し、現代的な空間として再編する可能性を探る。



図3 茨城県鹿嶋市宮中-鹿島神宮周辺

## 5. 提案

本計画では、観光と定住が断絶するのではなく、時間的・空間的に重なり合いながら成立する、新たな門前町の在り方を提案する。

### 5.1 歩行者中心の空間構成

歩行者中心の空間構成を実現するため、現在鹿島神宮周辺に分散して配置されている駐車場を二か所に集約し、その跡地となる三か所を本計画の敷地として選定する。敷地を分散的に配置することで、門前町全体に回遊性を生み出し、周辺の商店街や居住エリアとの関係性を再構築することを意図している。

### 5.2 店舗兼住宅の再構築

各敷地には、住戸、歴史館、セミパブリック空間を併設した建築群を配置する。歴史館は観光客に向けた展示機能を担うと同時に、地域の記憶や文化を共有する場として位置づけ、若者や来訪者の関心を高めることで、後継者不足といった課題の解消につなげる。住戸は地域に人が住み続けるための基盤として計画する。現在の門前町には、かつて商いと居住が一体となって機能していた店舗兼住宅が多く残されているが、生活様式や経済構造の変化によりその多くが十分に活用されず、空き家や空き店舗の増加を招いている。そうした状況を踏まえ、商いや地

域活動に関心を持つ人々が、暮らしを営みながら公共空間や地域と関わることのできる住環境を再構築することを目指す。

これらの建築の間に設けられる半公共的な空間は、観光と日常のあいだに緩やかな関係性を生み出す媒介となる。

## 6. 設計手法

### 6.1 行為を導く建築的ルールの構築

神社空間に見られる多様な作法や秩序に着目し、建築にも新たなルールを設定する。人の動線を曲線や曲面によって緩やかに誘導することで、行為の重なりや回遊性を生み出し、意識せずとも人々が建物を利用し、交流が生じる空間構成を目指す。

### 6.2 結びつけ

分析で抽出した「観光客と地域住民を結びつける潜在的要素」をさらに細分化し、それぞれを建築プログラムや空間構成として具体化する。

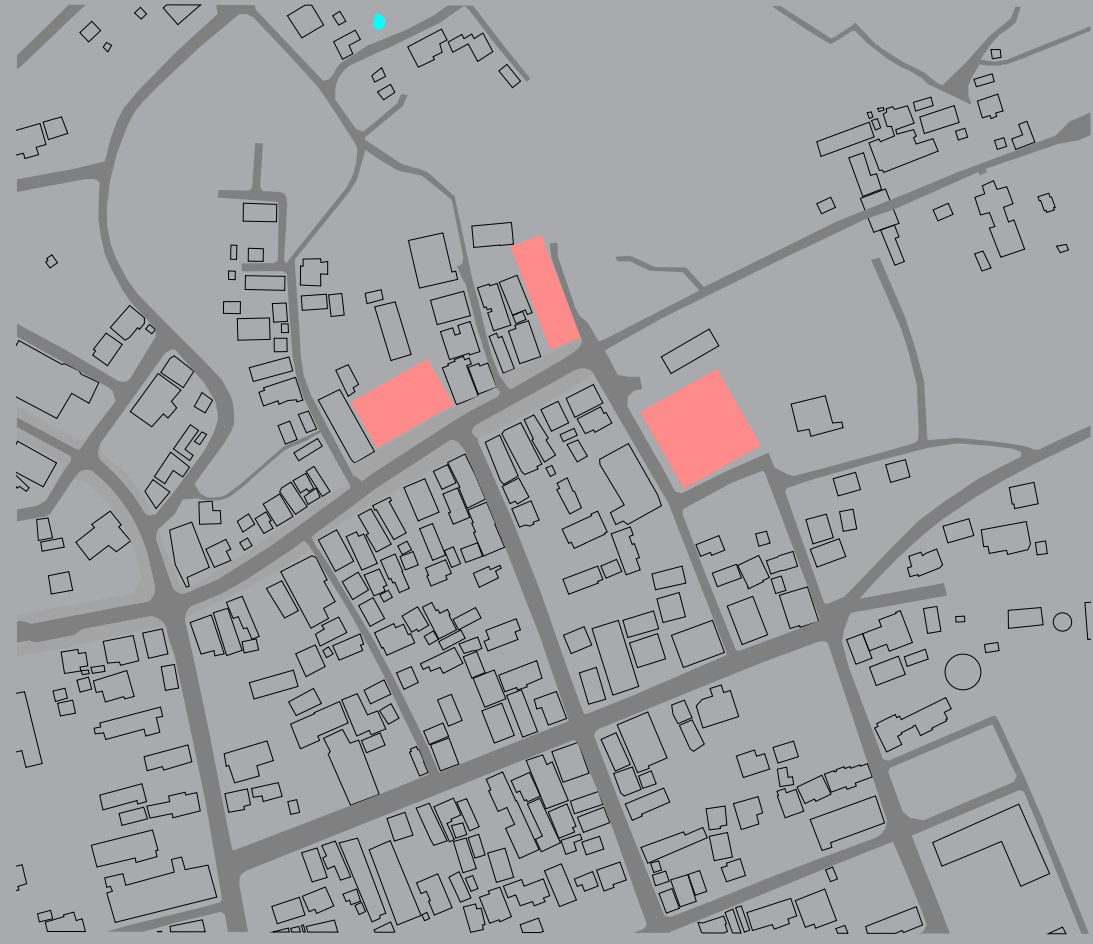
## 参考文献

- 1) 出入国在留管理庁 日本政府観光局 (JNTO)
- 2) 国立社会保障人口問題研究所 日本の地域別将来推計人口
- 3) 財務省 国勢調査
- 4) 財務省 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数
- 5) 国土地理院 地理院地図 GSI Maps  
<https://maps.gsi.go.jp/#5/36.102376/139.262695/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>

提案 -proposal-

歩行者中心の空間構成

歩行者中心の空間構成 ▶ 駐車場の集約



鹿島神宮周辺に分散して配置されている駐車場を二か所に集約。  
その跡地となる三か所を本計画の敷地として選定する。

敷地を分散させることで門前町全体に回遊性を持たせ、周辺の商店街や居住エリアとの関係性を再構築することを意図している。

歩行者中心の空間構成

地域住民

図書館  
多目的ホール

観光客

歴史関連施設  
地域産品販売

神社空間の境界要素を組み込むことで  
地域住民と観光客が  
ゆるく繋がる空間へ

・店舗兼住宅が十分に活用されていない  
・空き家・空き店舗の増加

▼

暮らしと商い・地域活動が  
両立する住空間を再構築

各敷地の建築群

住戸

歴史館

セミパブリック空間

観光客に向けた展示機能を担  
地域の記憶や文化を共有

▼

若者や来訪者の関心を  
後継者不足の課題解

設計 -design-

- 行為を導く建築的ルール of 構築 -

神社空間に見られる多様な作法や秩序に着目し、建築にも新たなルールを設定する。人の動線を曲線や曲面によって緩やかに誘導することで、行為の重なりや回遊性を生み出し、意識せずとも人々が建物を利用し、交流が生じる空間構成を目指す。

- 観光客の分散と地域住民の居場所 -

1. 祭りの場

- ・祭り関係に従事している人の住戸兼アトリエ
- ・観光客が祭りごとの体験をすることのできる空間

祭りの担い手不足と継承

2. 学びの場

- ・地域住民が気軽に立ち寄れる図書室
- ・従事者のための住戸兼作業場

地元関連の資料保管

3. 商いの場

- ・地元関連のショップ兼展示空間
- ・商いに従事している人の住戸兼アトリエ

地域産業の活性化